

（検討委員会資料）

－ モデル都市におけるコンパクトシティの検討 －

※検討委員会では、提言書とりまとめにあたり、
岩手県宮古市、山形県東根市、秋田県横手市の
3都市をモデルとして検討を行いました。

モデル都市におけるコンパクトシティの検討

I 宮古市におけるコンパクトシティの検討.....	2
II 東根市におけるコンパクトシティの検討.....	13
III 横手市におけるコンパクトシティの検討.....	25
IV モデル都市検討のまとめ	40

I 宮古市におけるコンパクトシティの検討

(1)宮古市の概要

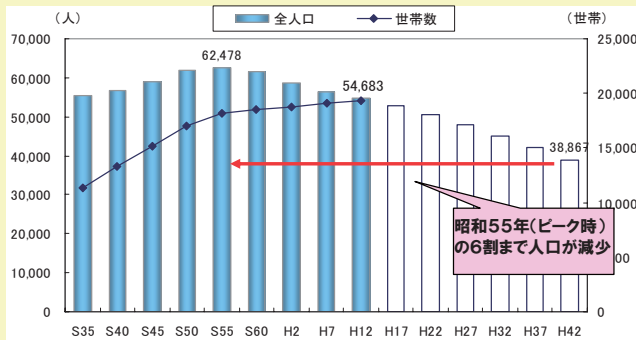
①宮古市の概要

- ・宮古市の人口は昭和55年以降減少しており、**平成42年には昭和55年(ピーク時)の6割まで人口が減少すると予測されている。**
- ・高齢化が大幅に進み、**30年後には3人に1人が高齢者となる。**
- ・DID人口密度は減少しており、平成12年には約43人/haとなっている。

- ・人口：54,683人 (H12)
- ・世帯数：19,347世帯 (H12)
- ・高齢化率：21.6%
- ・面積：339km²
- ・都市計画区域面積：75.4km²
- ・DID面積：4.77km²
- ・DID人口密度：42.8人/ha

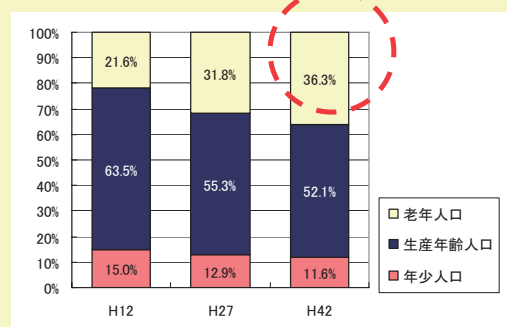
30年後には3人に1人が高齢者となる

人口・世帯数の推移



(資料: 国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所「日本の市区町村別将来推計人口」(平成15年12月))

高齢化割合の推移



(資料: 国立社会保障・人口問題研究所「日本の市区町村別将来推計人口」(平成15年12月))

②地区別動向

・土地利用の変遷

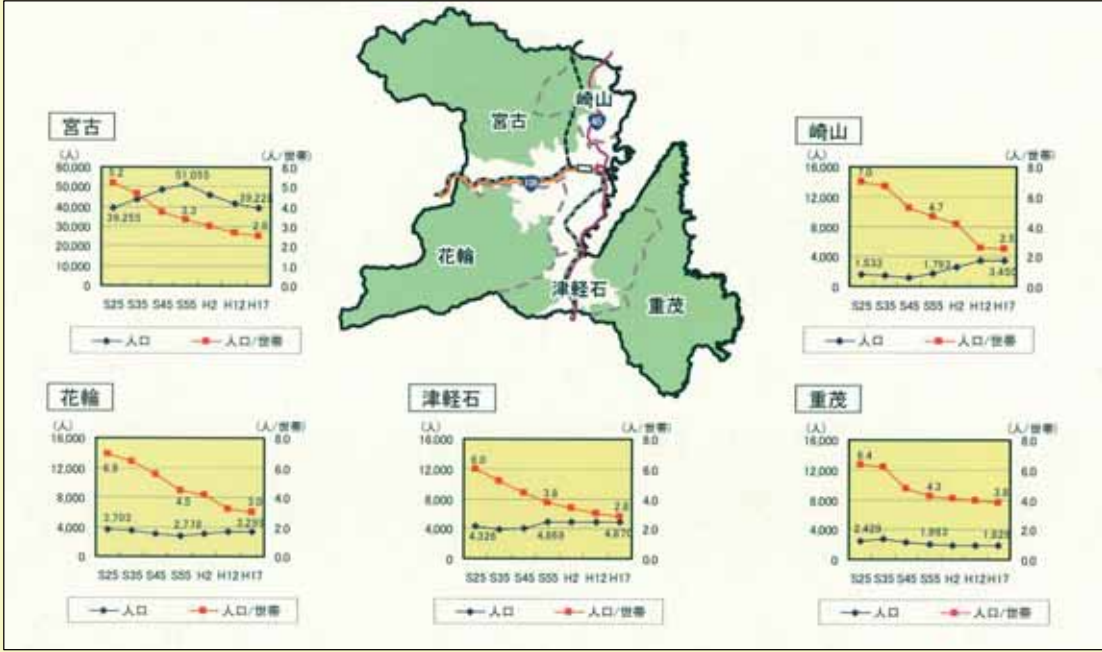
- ・宮古市は大正15年以降8市町村が合併し現在の宮古市を形成した。
- ・市域の大半が山林で、谷筋毎に市街地が形成され各地区毎に公民館等が設置されている。



- 凡例
- 市街地 (Red)
 - 主要集落 (Yellow)
 - 田畑 (Light Green)
 - 山林 (Dark Green)

・地区別人口の推移

- ・中心市街地を含む宮古地区の人口減少が著しい。
- ・一世帯当り人口の減少が進んでおり、いずれの地区においても核家族化が進んでいる。

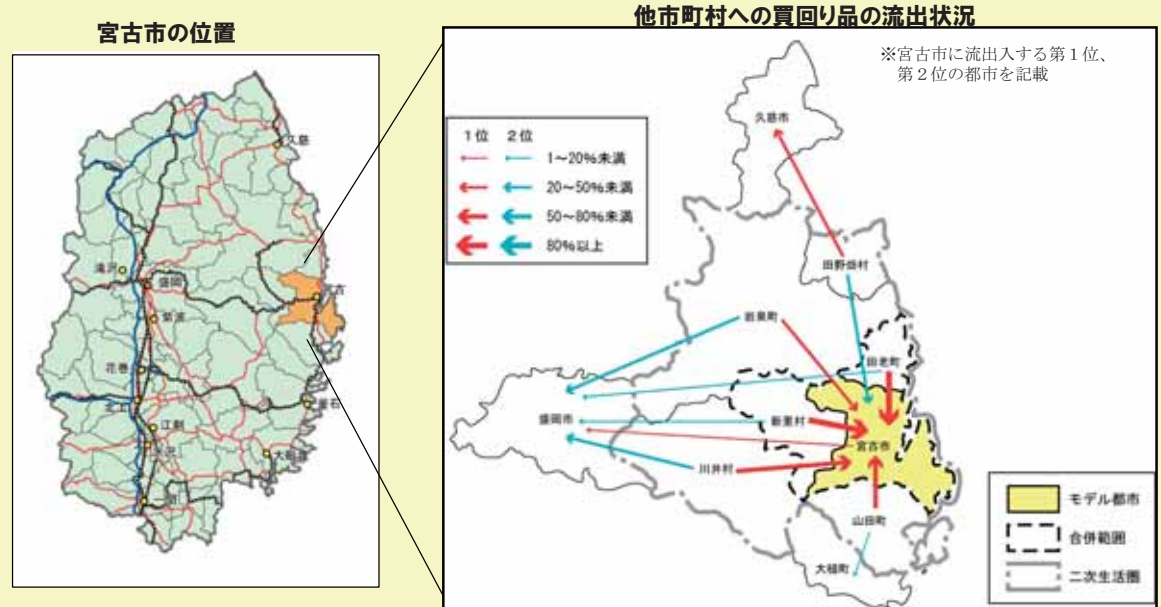


(資料:宮古市資料)

③都市間流動の状況

・買物流動

- ・宮古市は周辺町村の買い物依存度が高く、田老町等の買回りの約9割が宮古市に依存している。
- ・宮古市からの流出先は盛岡市が第1位で買回りの1割程度となっている。



(資料:平成15年度 岩手県買物動向調査)

・通勤通学流動

- ・通勤、通学とも他町村からの流入が多くなっており、周辺町村の依存度の高さが伺える。
- ・宮古市は、高校、短大が立地するため、周辺町村から通学する学生が多く、通学者の約16%を市外が占めている。

通勤流動

働く	住む	
	宮古市	宮古市以外
	宮古市	23,365人
宮古市以外	2,063人	—

他市町より流入する人口の方が多い



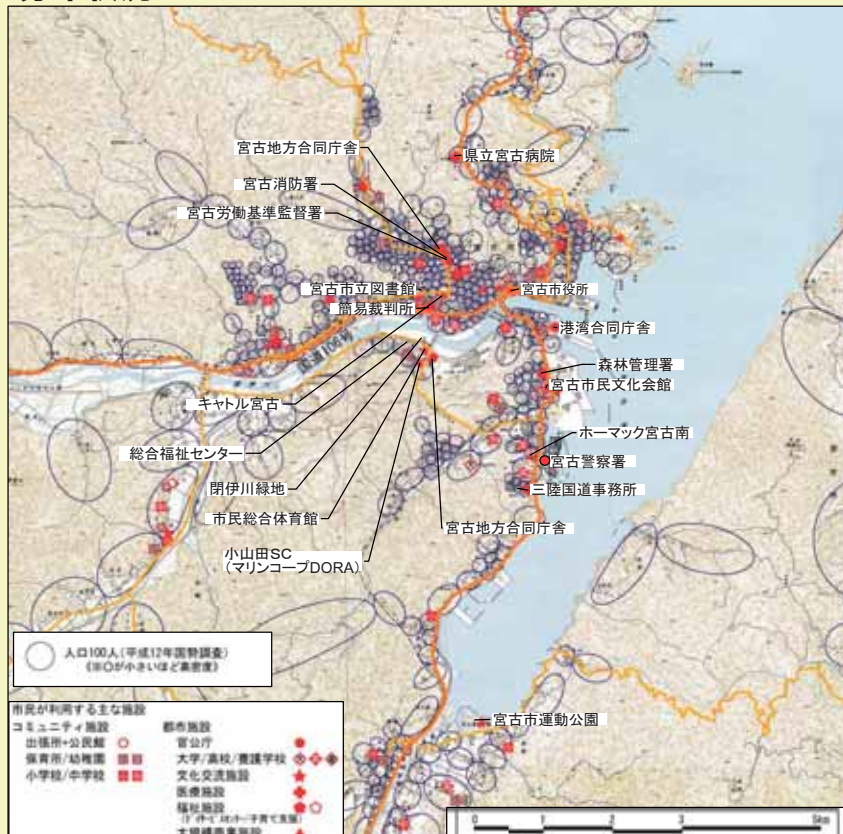
通学流動

学ぶ	住む	
	宮古市	宮古市以外
	宮古市	9,545人
宮古市以外	381人	—

他市町より流入する人口の方が多い

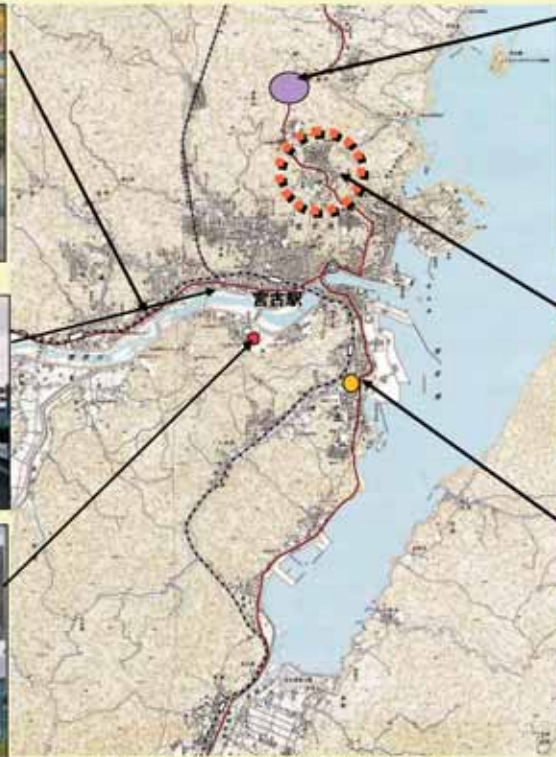


④都市施設の分布状況



(2)宮古市の土地利用状況等

①市街地周辺の状況

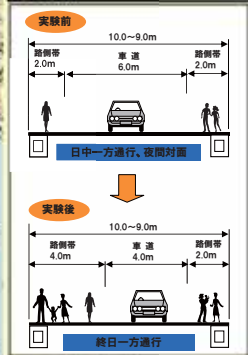


(国土地理院発行の2万5千分の1地形図 (宮古))

②街なかの状況



平成17年度に実施した社会実験



(国土地理院発行の2万5千分の1地形図 (宮古))

(3)宮古市の都市構造の特性・課題

宮古市の特性	ヒアリング結果	宮古市の都市構造上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ・リアス式海岸の地形的な制約により、平坦地が少ない。津波による被害が発生しやすい。 ・閉伊川河口にT字型の市街地を形成、郊外に住居系市街地が点在 ・古い住宅団地の高齢化が進行。敷地が狭く、多世帯住宅等の立地が困難で、建替えが進まない。 ・昭和の合併により都市施設が分散 ・鉄道本数が少なく、比較的バス利用率が高い。 ・東西に約1km程度の中心市街地を形成 ・県立病院の移転等に伴い、中心部の空洞化が進行。約1割が空店舗 ・中心商店街は、無歩道区間が多い。店舗併用住宅が多い。 ・街なかへの住み替え意向は少ない。 ・大きな商圏を形成しにくいので、今後も大型店の立地は見込まれない。 ・TMO等の取り組みはあるものの、地域活動はあまりみられない。 ・買回り品の購入などで盛岡市との繋がりが深い。 	<p>【市街地関連】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平地が少なく、乱開発の懸念はない。 <p>【中心市街地関連】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県立病院が郊外に移転 ・駅前のサティが撤退した跡をTMOが「キャトル宮古」として再生 ・風格のある、歩いて楽しい駅前に向けて駅前広場を整備中 ・車社会、中心市街地の魅力不足等を背景に街なか居住のニーズが生まれない <p>【交通関連】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市民バスを運行、今後も維持 ・鉄道本数が少ない。 <p>【行政コスト関連】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市街地の再整備は財政上困難 <p>将来動向</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆平成42年には昭和55年(ピーク時)の6割まで人口が減少 ◆高齢者数は5人に1人から3人に1人に増加する。 	<p>宮古市の都市構造上の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> ①安全・安心な暮らし <ul style="list-style-type: none"> ◆狭い市街地の中で、安心して住み続けるための住環境の向上が必要 ②アクセシビリティの確保 <ul style="list-style-type: none"> ◆点在する都市機能や集落などを繋げる、バス等の公共交通の活用促進 ◆歩道が少ない街なかの歩行者の安全性の確保 ③都市機能の適正配置 <ul style="list-style-type: none"> ◆キャトル宮古や商店街等、今ある機能を活かした街なかの魅力の向上 ④コミュニティの維持・再生 <ul style="list-style-type: none"> ◆津波など災害時の協体制を強化 ◆農漁村との交流不足の改善 ◆少ない可住地の有効活用 ◆まちづくりへの多様(NPOやTMO等)な主体の参加が必要 ⑤環境・景観に配慮した都市の形成 <ul style="list-style-type: none"> ◆宮古湾の水産業を育むために、山地の開発を抑制 ⑥都市経営 <ul style="list-style-type: none"> ◆水産業を活かした地域産業の活性化が必要

11

(4)宮古市におけるコンパクトシティの検討

特徴ある生活サービス拠点が市民生活を重層的に支えるクラスター型コンパクトシティ

宮古市はリアス式海岸の特徴により、海と山に囲まれており、限られた平坦地を中心に市街地を形成してきた。今後も人口が減少していく中で、安心して住み続けられる住環境を形成していく必要がある。

そのため、分散している都市拠点を連携し、相互に補完・連携しあうシステムを構築することにより、市民が安心して都市機能を楽しむことができる都市の形成が望まれる。

<p>①安全安心の暮らし</p> <p>限られた市街地を活かし、中層の魅力ある建物整備等により快適で安心して住み続けられる空間を形成</p>	<p>④コミュニティの維持再生</p> <p>災害に対する市民・企業等の応援体制の強化 周辺の農漁村との交流に向けた市民主体の活動の展開 コミュニティの活性化のための街づくり主体の拡充</p>
<p>②アクセシビリティの確保</p> <p>宮古駅前広場整備を中心に、点在する都市拠点や中山間地をネットワークするバス網をデマンドシステム等の多様な手段で展開</p>	<p>⑤土地利用のあり方</p> <p>山林は保全を図ることを基本とし平坦地の有効活用を図る。</p>
<p>③都市機能の適正配置</p> <p>街なかは市民の買い物の場、ちょっとしたハレの場として、安心して歩ける道路空間が確保された、歩いて楽しめる商店街を形成</p>	<p>⑥環境・景観に配慮した都市の形成</p> <p>基幹産業である水産業の振興を図る観点からも、山林開発を抑制し自然環境を保全</p> <p>⑦都市経営</p> <p>水産物の高付加価値化等を推進し、宮古ブランドの形成を図る。</p>

12

Ⅱ 東根市におけるコンパクトシティの検討

13

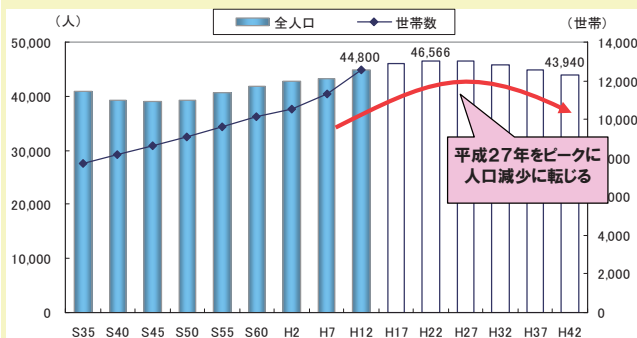
(1) 東根市の概要

① 東根市の概要

- ・東根市の人口は約45,000人で増加傾向にあるが、**平成22年をピークに減少に転じる**。
- ・高齢化は確実に進み、30年後には3人に1人が高齢者となる。
- ・DID面積は昭和45年からほとんど変わっていない。人口密度は約30人/ha前後で推移し、低密度な市街地となっている。

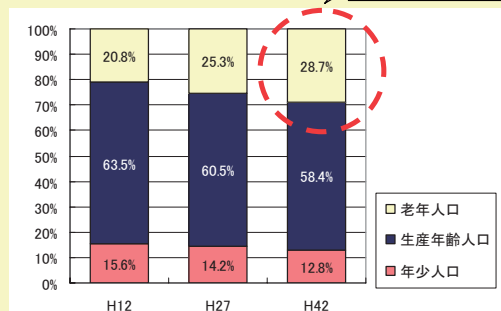
- ・人口：44,800人 (H12)
- ・世帯数：12,579世帯 (H12)
- ・高齢化率：20.8%
- ・面積：207km²
- ・都市計画区域面積：62.3km²
- ・DID面積：4.46km²
- ・DID人口密度：26.8人/ha

人口・世帯数の推移



(資料：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所「日本の市区町村別将来推計人口」(平成15年12月))

高齢化率の推移



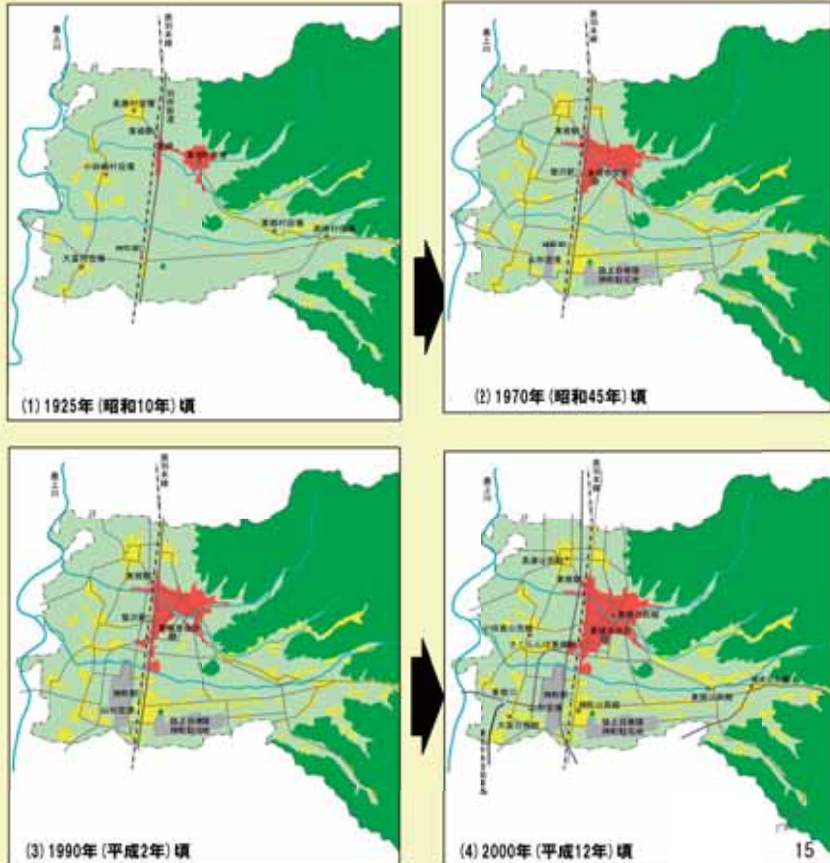
(資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の市区町村別将来推計人口」(平成15年12月))

14

②地区別動向

・土地利用の変遷

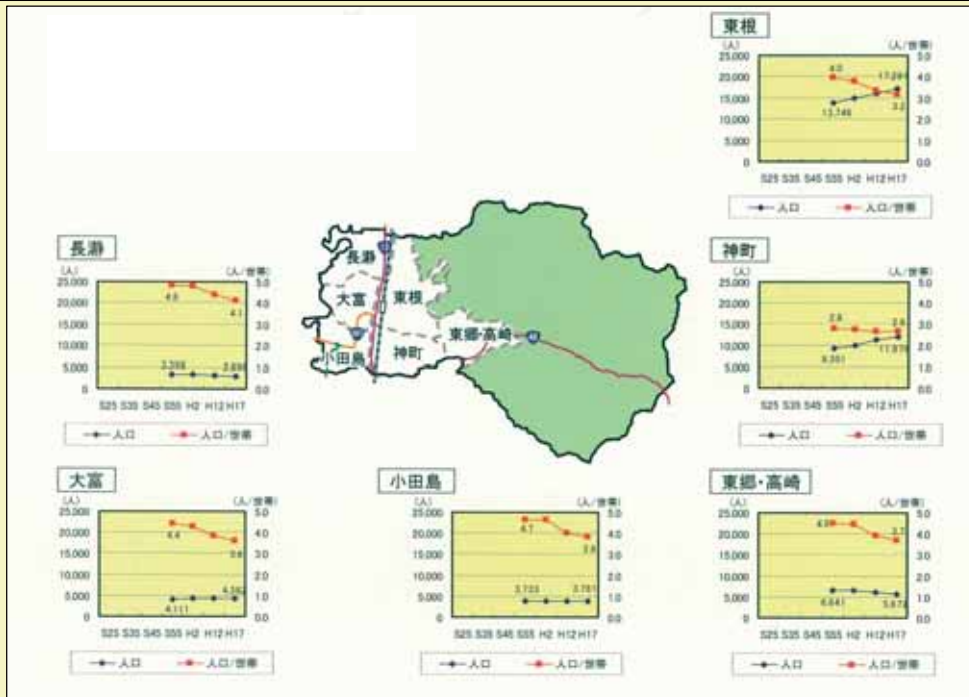
・昭和29年に6町村が合併し、東根町となり、その後市制に移行した。
 ・市町村合併や市街地拡大と共に市役所が市街地外縁部に移転した。
 ・高速交通網や工業団地等の整備が進み、東根地区の市街地はさらに拡大しているが、旧役場周辺においてもまとまりのある集落が形成されている。



15

・地区別人口の推移

・東根市全体の人口が増加している一方で、家屋が密集している長瀬地区や中山間地を有する東郷地区では人口減少が進んでいる。
 ・長瀬、大富地区等は一世代当たり人口が概ね4人程度であり、多世代居住が多いことが伺える。



(資料: 東根市資料)

16

③都市間流動の状況

・買い物流動

・東根市は国道13号沿いに市が連担しており、隣接する市から買い物に訪れる比率が高い。
 ・東根市が流出する買い物先としては、山形市が一番となっているが、流出割合は約20%程度となっている。

他市町村への買回りの品物の流出状況



(資料:平成15年度 山形県買物動向調査)

17

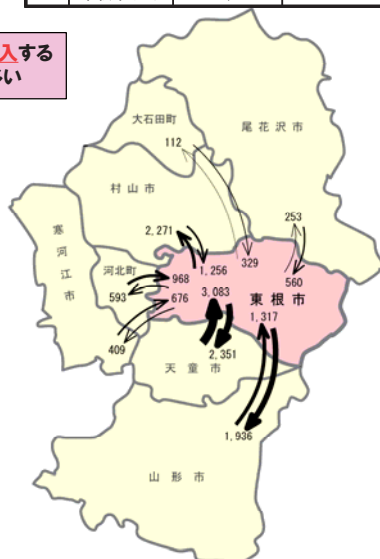
・通勤通学流動

・東根市は山形県有数の工業団地等を有することから、周辺町村からの従業員の流入が多くなっている。
 ・通学流動は近接する山形市との関係が強く、市外への流出が多くなっている。

通勤流動

働く	住む	
	東根市	東根市以外
東根市	17,512人	10,155人
東根市以外	7,367人	—

他市町より流入する人口の方が多い



(資料:平成12年国勢調査)

通学流動

学ぶ	住む	
	東根市	東根市以外
東根市	5,130人	747人
東根市以外	3,053人	—

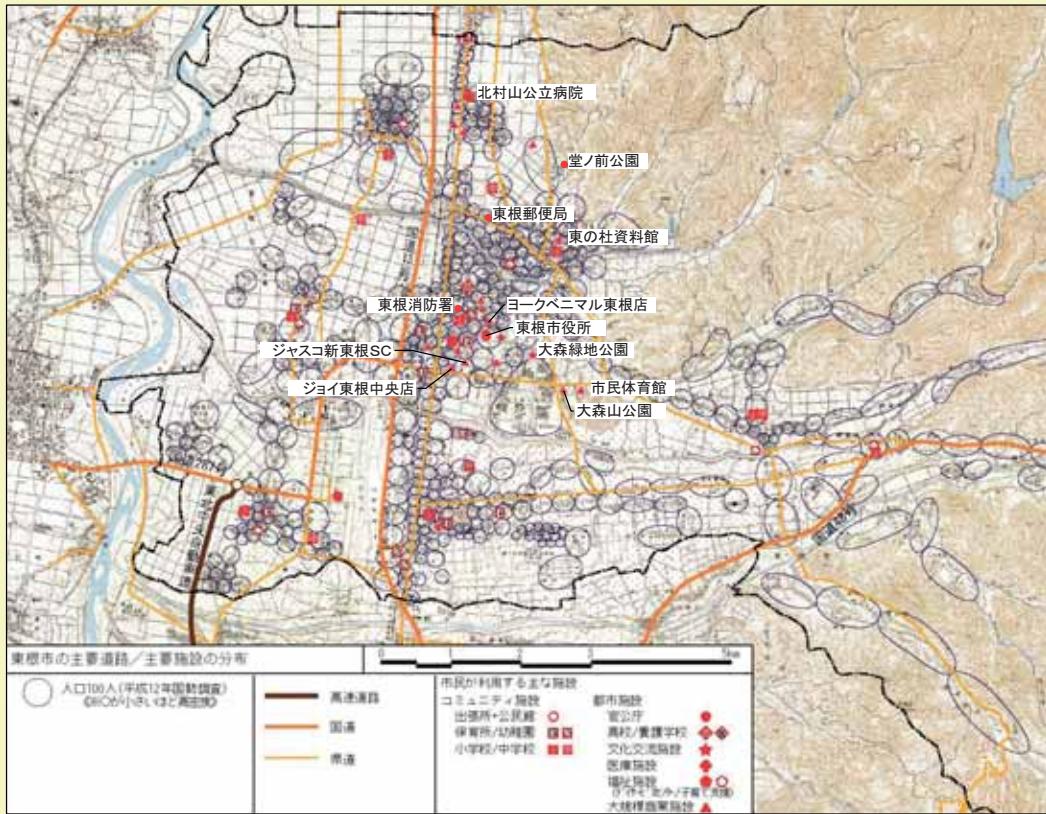
他市町へ流出する人口の方が多い



(資料:平成12年国勢調査)

18

④都市施設の分布状況



(国土地理院発行の2万5千分の1地形図(天童、楯岡))

(2)東根市の土地利用状況等

①市街地周辺の状況



(国土地理院発行の2万5千分の1地形図(天童、楯岡))



長瀬地区

ながとろ
【長瀬地区】

江戸時代中期、米津氏が長瀬藩1万2千石の藩主としてこの地に入封し、陣屋と称してこの地に住んだ。なお、戊辰戦争により陣屋は破壊され、堀跡だけが一部残されている



一の堀(跡)



二の堀

②街なかの状況



(国土地理院発行の2万5千分の1地形図(天童、楯岡))

(3)東根市の都市構造の特性・課題

東根市の特性	ヒアリング結果	東根市の都市構造上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ・昭和の合併により1町5村が合併。東根温泉、東根本町、神町の3つの市街地と、その周辺に農村集落が点在 ・果樹を中心とした農業が盛んで、さくらんぼ生産が日本一 ・昭和50年代には工業団地の造成に着手。山形第2位の生産を誇る。 ・高速道路、新幹線、空港の高速交通の利便性に恵まれている。 ・市街地は概ね平坦地。未利用地がある。 ・新幹線駅前に大型商業施設を誘致、地区計画による店舗の誘導 ・東根温泉、東根本町、神町の既成市街地では、人口減少、高齢化が進行。敷地が狭く、接道条件が悪いため、建て替えが進まない。 ・高齢者の街なか居住のニーズはあまり聞かない。 ・駅周辺や神町北部に新築住宅が増加。若い世代が移住 ・高校、買回り品等は山形市と繋がりが深い。 	<p>【市街地関連】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新幹線駅前を市の核として位置づけ一本木区画整理事業を実施 ・既成市街地に隣接する地区で区画整理を実施し、世帯増加を吸収 ・集落は、道路が狭隘 ・郊外の大型店舗の立地予定あり <p>【中心市街地関連】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東根本町で、歩いて楽しめる街づくりを実施(ウォーキングトレイル等) <p>【交通関連】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市民バスを運行し空白地帯を解消 ・隣接する河北町とバスの相互乗り入れを実施 <p>【環境関連】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境対策関連施策を実施 <p>【行政コスト関連】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・街路事業はほぼ終了 維持管理費では特に問題なし <p>将来動向</p> <ul style="list-style-type: none"> ①将来人口は平成27年をピークに減少に転じ、緩やかに減少する。 ②高齢者数は5人に1人から3人に1人に増加する。 	<p>①安全・安心な暮らし</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆東根本町、長瀬の既成市街地において、雪対策、高齢者の生活支援等居住環境の向上が必要 <p>②アクセシビリティの確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆市民バスを充実し、点在する集落、周辺市町村の生活を支えることが必要 <p>③都市機能の適正配置</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆一本木土地区画整理事業地区が市の顔となるような市街地づくり <p>④コミュニティの維持・再生</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆高齢化が進行する既成市街地におけるコミュニティの維持 ◆まちづくりへの多様(NPOやTMO等)な主体の参加が必要 <p>⑤土地利用のあり方</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆白地地域の大規模店舗の立地抑制 <p>⑥環境・景観に配慮した都市の形成</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆城址付近の水路やお堀、田園景観等身近な自然環境の管理。 ◆個性的な集落の歴史や景観への配慮が必要 <p>⑦都市経営</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆停滞している臨空工業等の産業の活性化が必要

(4)東根市におけるコンパクトシティの検討

農作物や自然緑地等身近な環境がまちを彩る緑住コンパクトシティ

東根市では、日本一のさくらんぼ生産や東根温泉など地域の**産業が継承できる都市づくり**が求められており、それが東根市を持続的に発展させていくことにつながる。

歴史的な旧市街地や優れた環境・景観を保全する一方、高速交通体系の利用を拡大して、都市と農村の交流を促進するなど、**豊かな自然と新たな交流拠点が同居する都市**の形成が望まれる。

- | | |
|---|--|
| <p>①安全安心の暮らし</p> <p>東根本町、長瀬の既成市街地において、安心して住み続けられる生活環境の形成</p> | <p>④コミュニティの維持再生</p> <p>さくらんぼ等を媒介とした他の都市農村の交流など多様なコミュニティの参加促進</p> <p>コミュニティの活性化のための街づくり主体の拡充</p> |
| <p>②アクセシビリティの確保</p> <p>集落、周辺市町村の生活を支える市民バスネットワークの強化</p> | <p>⑤土地利用のあり方</p> <p>国道沿いの大規模店舗の立地等を抑制するなど市街地拡大のコントロールと市街地内未利用地の有効活用を推進</p> |
| <p>③都市機能の適正配置</p> <p>さくらんぼ東根駅周辺への公共公益施設等の集積による中心地区の形成</p> | <p>⑥環境・景観に配慮した都市の形成</p> <p>りんごやさくらんぼといった果樹や田園など、身近な緑に囲まれた農村景観や生活環境の保全</p> <p>城址や環濠集落などの歴史的景観の保全</p> |
| <p>⑦都市経営</p> <p>空港等の立地特性を活かした産業の振興</p> | |

Ⅲ 横手市におけるコンパクトシティの検討

25

(1) 横手市の概要

① 横手市の概要

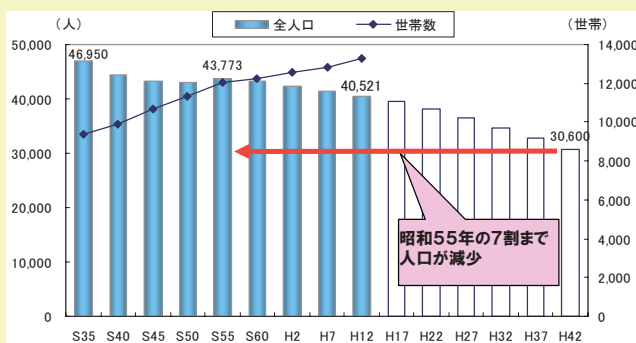
・横手市の人口は昭和55年以降減少しており、**平成42年には昭和55年の7割まで人口が減少すると予測されている。**

・高齢化が大幅に進み、**30年後には約40%が高齢者となる。**

・DID面積は緩やかに増加し、一方で人口密度は低下し40人/haとなっている。

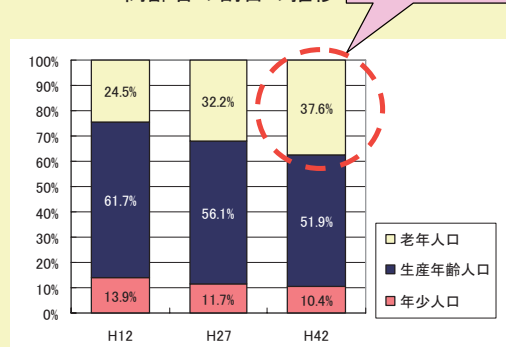
・人口：40,521人 (H12)
 ・世帯数：13,257世帯 (H12)
 ・高齢化率：24.8%
 ・面積：111km²
 ・都市計画区域面積：80.4km²
 ・DID面積：3.91km²
 ・DID人口密度：40.0人/ha

人口・世帯数の推移



(資料：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所「日本の市区町村別将来推計人口」(平成15年12月))

高齢者の割合の推移



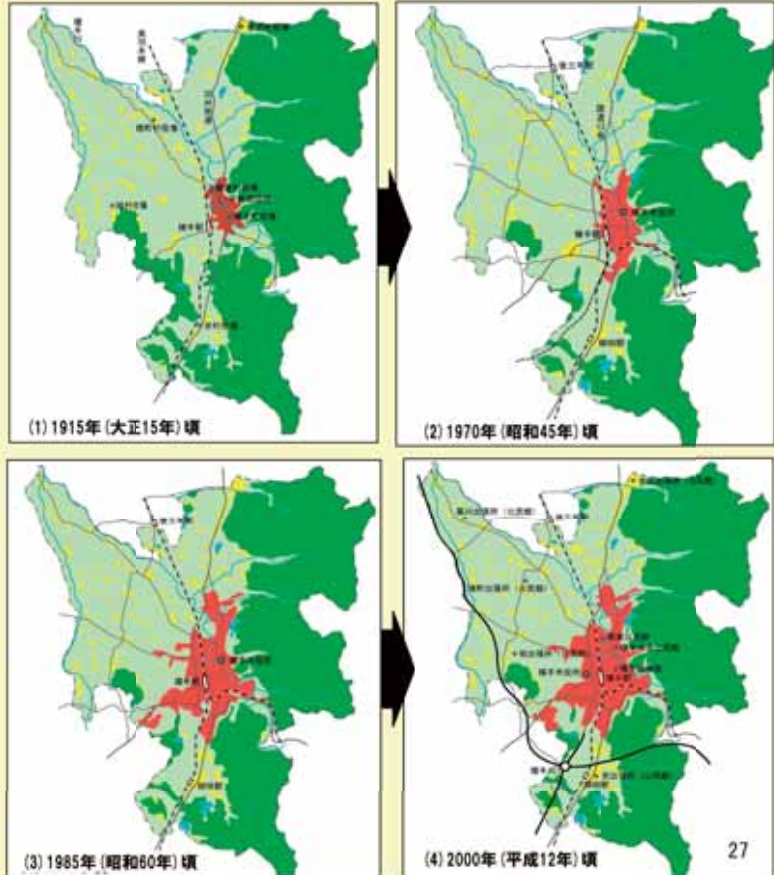
(資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の市区町村別将来推計人口」(平成15年12月))

26

②地区別動向

・土地利用の変遷

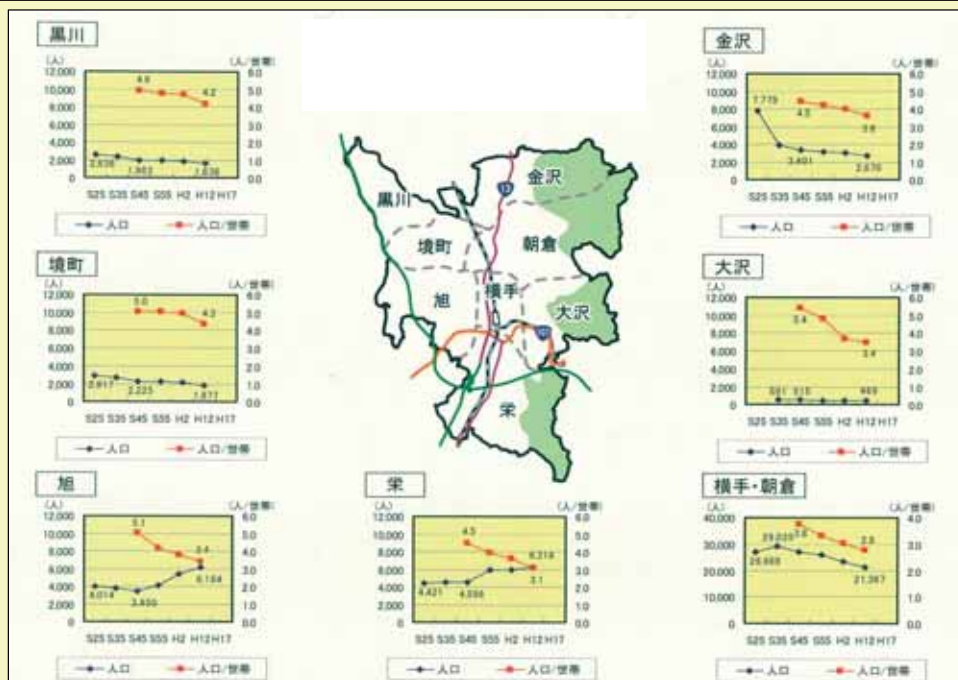
- ・城下町から発展した旧横手町を中心に、昭和8年以降6町村が合併し、現在の横手市となる。
- ・鉄道や道路網の整備に伴い、市街地が同心円状に拡大し、住宅団地等が郊外に立地した。
- ・旧町村の役場周辺は現在も公民館等が立地する地区の中心部を形成している。



27

・地区別人口の推移

- ・住宅団地が整備された、旭、栄地区では人口が増加している。
- ・中心部の横手地区や黒川地区等の農村部では、一貫して人口減少が続いている。
- ・黒川、境町地区等の農村部は、一世帯当たり人口が4人を上回っており、多世代居住が多いことが伺える。



28

(資料:横手市資料)

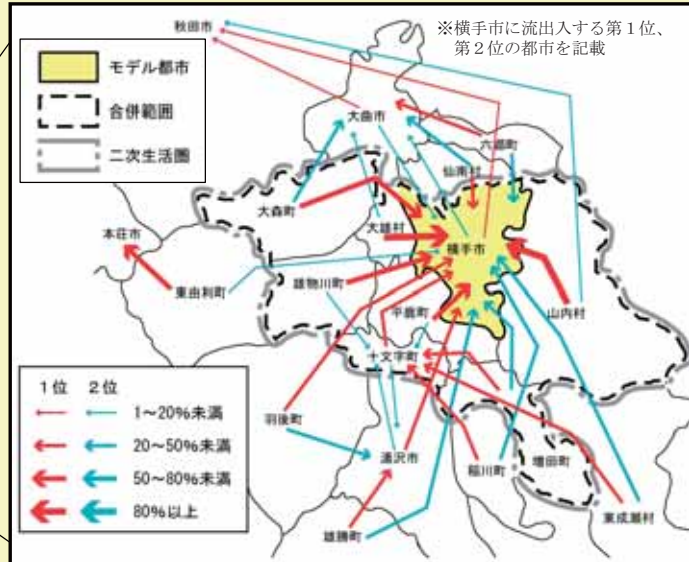
③都市間流動の状況

・買い物流動

- ・横手市は秋田県南地域の**商業拠点**を形成しており、周辺市町村からの流入が多い。
- ・横手市から買い物の流出先としては、秋田市が第1位となっているが、流出率は約6%と低い値にとどまっている。



図一他市町村への買回り品の流出状況



(資料:平成16年度 消費購買動向調査)

・通勤通学流動

- ・横手市は、通勤通学流動とも他市町村から流入する人口が流出を大きく上回っており、県南地域の中心的な役割を担っている。

通勤流動		住む	
		横手市	横手市以外
働く	横手市	16,809人	9,830人
	横手市以外	3,347人	—

他市町より流入する人口の方が多い



合併範囲

(資料:平成12年国勢調査)

通学流動		住む	
		横手市	横手市以外
学ぶ	横手市	5,930人	3,303人
	横手市以外	1,110人	—

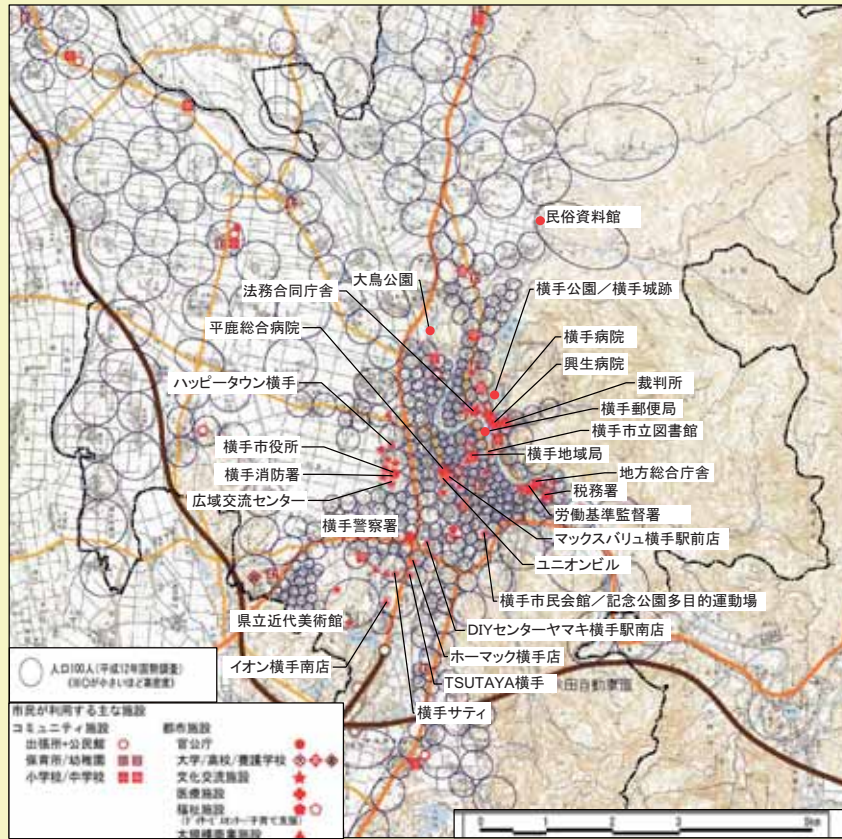
他市町より流入する人口の方が多い



合併範囲

(資料:平成12年国勢調査)

④ 都市施設の分布状況



31

⑤ 市街地部と周辺農村部の関係事例

・TMOの取り組み

TRY21は中心市街地における「まちづくり」と「商業活性化」の両立を目指すため、コミュニティビジネスを中心とした事業に取り組んでいる。

＜手の市(商業祭)の開催＞



- ・地元商店によるワンコインの商品を提供
- ・2日間で約4千人が来店

＜こうじ庵の管理運営＞



- ・古い商家を改修
- ・市民の憩いの場イベント場として活用

＜暖簾の作成＞



- ・商店の女将さんの提案を事業化
- ・木綿の産地、藍染の地を活かした暖簾の統一

＜こうじ庵のイベント＞



- ・手作りあかり展
- ・地元食材の京会席
- ・伝統工芸品展
- ・学びの座布団 など

＜その他取り組み＞

商品開発(雪見まんじゅう等)、空き店舗活用(紹介、補助金等)など

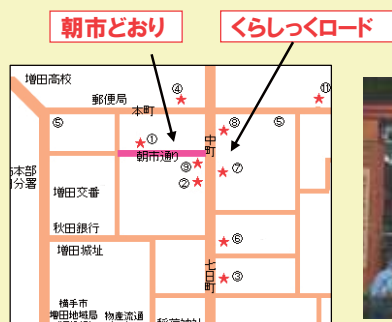
(出典: TRY21(タウンリノベーションよこて株式会社)HP)

32

・旧増田町(横手市)の朝市

旧増田町の朝市は、佐竹藩の公認で寛永20年(1643年)に始まり、約360年の歴史を誇る。現在も「2・5・9」の付く日に通称「朝市通り」にて開催されている。地域の特性に根付いた取り組みにより、現在も多くの人が訪れる。

また、古くからの街並みを活かした通りを「くらしっくロード」と名付け、景観形成等に取り組んでいる



「くらしっくロード」の街並み



旧増田町の朝市

33

・旧平鹿町(横手市)の浅舞婦人部会の取り組み

浅舞婦人部会では、捨てられていた規格外の野菜を、女性たちの得意分野である地域の伝統的な漬物にすることにより、地域の特産物づくり、女性の働く場の提供が同時に図られ、地域の活性化に大きな役割を果たしている。

<浅舞漬けの販売>



- ・24種類の漬物を製造
- ・売上げは年間で2億6千万円

(出典:「立ち上がる農山漁村」(平成18年度)農林水産省HP)

<地元農産物を活かした製造>



- ・平鹿町の200戸の農家が栽培した野菜を使用
- ・味噌や酒粕も地元の素材を使用

<出荷先、通販>



- ・出荷先は、県内6割、県外が4割。海外でも販売
- ・婦人会のHPIにてインターネット通販を実施しており、1万人以上が利用

(出典:浅舞婦人漬物研究会HP)

<朝市での販売>



平鹿町浅舞覚町(イベント広場)

- ・浅舞漬けなどの地元食材を朝市で販売

(出典:秋田県観光総合ガイドHP)

34

⑥市町村合併後の連携について

新市建設計画では、旧市町村の市街地をまちづくりの拠点地区として設定し、旧市町村間の連携強化や、広域的な交流拡大を位置づけている。



新市まちづくりのゾーニング

●拠点地区と交流・連携の方針

拠点地区間において親密で活発な地域交流が行われ、さらに広域交流の進展につながるよう交流の連携軸を設定し、その動脈となる基幹道路の整備にあたりとともに、関連する生活道路等の改良充実に努めます。

(新市建設計画より)

(資料:「新市建設計画」(横手平鹿8市町村合併協議会))

35

(2)横手市の土地利用状況等

①市街地周辺の状況



(国土地理院発行の2万5千分の1地形図(横手、金沢本町))

36

②街なかの状況



(3)横手市の都市構造の特性・課題

横手市の特性

- ・昭和の合併により市域が拡大、城下町から発展した中心市街地と、郊外に点在する農村集落よりなる。
- ・概ね旧町村単位で出張所、小中学校、最寄品を扱う商店などが立地し拠点を形成
- ・秋田自動車道と湯沢横手道路が連結
- ・1980年代まで、横手駅東側で**区画整理等による市街地整備**を推進
- ・国道13号等の主要幹線道路沿道に大型店立地するなど、市街地が西側に拡大(駅前から撤退)
- ・横手駅周辺には大型商業施設、文化交流施設が立地
- ・街なかには**流雪溝等の社会基盤施設の整備が充実**
- ・中心部の街道沿い等に**古くからの宿場町・城下町の街なみ**が残る。
- ・古くからの市街地は高齢化率が高い。
- ・平鹿総合病院を西側に移転・整備中

ヒアリング結果

【市街地関連】

- ・用途地域外に住宅地や大型店の立地が見られる。
- ・大型店の立地計画があり、農家と業者で合意済みだが、**農政側が開発を阻止**

【中心市街地関連】

- ・平鹿総合病院跡地で**再開発を計画**(商業、住居、福祉の複合用途)
- ・駅西口広場、自由通路の整備
- ・中活の再提出、準工規制を検討中
- ・街なか**は家賃が高い**。郊外は家賃が安く設備も良いため、若い世帯が居住

【交通関連】

- ・横手駅西口広場を整備中
- ・公共施設の移転に伴う**バス路線の再編**

【行政コスト】

- ・農村公園の指定管理者制度の導入
- ・教育・除雪等の市民サービスの維持

将来動向

- ①平成42年には昭和55年(ピーク時)から**約30%の人口が減少**する。
- ②平成42年には**高齢化率も約40%**となり、超高齢社会となる。

横手市の都市構造上の課題

- ①**安全・安心な暮らし**
◆豪雪地であり、なおかつ高齢化が進むことから、除雪ボランティア等の除排雪を強化し、**安心して暮らせる生活環境の維持**が必要
- ②**アクセシビリティの確保**
◆公共交通の利用が低下しており、地域にあったバス交通の見直しが必要
- ③**都市機能の適正配置**
◆横手駅西口や駅前再開発などの促進による**中心部の都市機能の充実**
- ④**コミュニティの維持・再生**
◆豊かな歴史・文化を活かしたコミュニティの維持・再生が必要
◆まちづくりへの多様(NPOやTMO等)な主体の参加が必要
- ⑤**土地利用のあり方**
◆市街地外延に広がる土地利用拡大の**抑制**
- ⑥**環境・景観に配慮した都市の形成**
◆山や川など**横手盆地に広がる身近な自然**を保全していくことが必要
- ⑦**都市経営**
◆インフラストックの拡大に伴う、除排雪の負荷の増大

(4)横手市におけるコンパクトシティの検討

中心市街地を基点として、市街地や集落が連結されるネットワーク型コンパクトシティ

横手市は秋田県南部の中心的な都市であることから、**魅力ある中心部を有する都市づくり**が求められており、それが横手市と周辺地域を持続的に発展させていくことにつながる。

そのため、都市的サービスを提供する街なかと周辺集落、町村部が、相互連携する一体的な都市圏を作り上げて、歴史や文化を継承する持続可能な都市圏を形成することで、高齢化社会においても安全安心な暮らしが営まれる。

①安全安心の暮らし

雪が降っても高齢者など多くの市民が安心して暮らせる中層の住宅、流雪溝、除排雪ボランティア等の施設・機能が維持・拡充された市街地の形成

④コミュニティの維持再生

かまくらをはじめとする歴史・文化を活用した他の都市と農村の交流促進
コミュニティの活性化のための街づくり主体の拡充

②アクセシビリティの確保

バスターミナル整備、再開発にあわせた、街なかへのアクセスが向上するバス交通網の整備

⑤土地利用のあり方

農政側との連携を図り、幹線道路沿道に広がる市街地拡大を抑制

③都市機能の適正配置

再開発事業や駅西側の区画整理事業など、横手駅を中心とした都市機能の拡充

⑥環境・景観に配慮した都市の形成

横手川などの自然環境の保全、城下町の歴史的な街並みの保全

⑦都市経営

市街地に集積した都市機能のストックを有効活用し新たな開発投資の抑制

39

IV モデル都市検討のまとめ

40

モデル都市のコンパクトシティ像の整理

	宮古市	東根市	横手市
コンパクトシティ像	特徴ある生活サービス拠点が市民生活を重層的に支えるクラスター型コンパクトシティ	農作物や自然緑地等身近な環境がまちを彩る緑住コンパクトシティ	中心市街地を基点に市街地や集落が連結されるネットワーク型コンパクトシティ
安全安心な暮らし	限られた市街地を活かし、中層の魅力ある建物整備等により快適で安心して住み続けられる空間を形成	東根本町、長瀬の既成市街地において、安心して住み続けられる生活環境の形成	雪が降っても高齢者など多くの市民が安心して暮らせる中層の住宅、流雪溝、除排雪ボランティア等の施設・機能が維持・拡充された市街地の形成
アクセシビリティの確保	宮古駅前広場整備を中心に、点在する都市拠点や中山間地をネットワークするバス網をデマンドシステム等の多様な手段で展開	集落、周辺市町村の生活を支える市民バスネットワークの強化	バスターミナル整備、再開発にあわせた、街なかへのアクセスが向上するバス交通網の整備
都市機能の適正配置	街なかには市民の買い物の場、ちょっとしたハレの場として、安心して歩ける道路空間が確保された、歩いて楽しめる商店街を形成	さくらんぼ東根駅周辺への公共公益施設等の集積による中心地区の形成	横手駅を中心とした、都市機能の拡充
コミュニティの維持・再生	災害に対する市民・企業等の応援体制の強化 周辺の農漁村との交流に向けた市民主体の活動の展開 コミュニティの活性化による街づくり主体の拡充	さくらんぼ等を媒介とした他の都市農村の交流促進など多様なコミュニティの参加促進 コミュニティの活性化のための街づくり主体の拡充	かまくらをはじめとする歴史・文化を活用した他の都市と農村の交流促進 コミュニティの活性化のための街づくり主体の拡充
土地利用のあり方	山林は保全を図ることを基本とし平坦地の有効活用を図る	国道沿いの大規模店舗の立地等を抑制するなど市街地拡大のコントロールと、市街地内未利用地の有効活用を推進	農政側との連携を図り、幹線道路沿道に広がる市街地拡大を抑制
環境・景観に配慮した都市の形成	基幹産業である水産業の振興を図る観点からも、山林開発を抑制し自然環境を保全。	りんごやさくらんぼといった果樹や田園など、身近な緑に囲まれた農村景観や生活環境の保全 城址や環濠集落などの歴史的景観の保全	横手川などの自然環境の保全、城下町の歴史的な街並みの保全
都市経営	水産物の高付加価値化等を推進し、宮古ブランドの形成を図る。	空港等の立地特性を活かした産業の振興	市街地に集積した都市機能のストックを有効活用し新たな開発投資の抑制

41

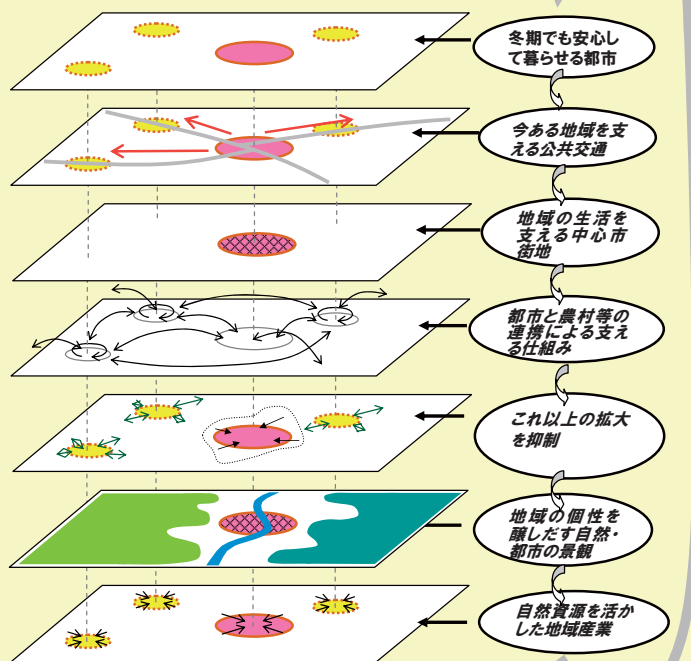
モデル都市の検討

宮古市 東根市 横手市

【モデル都市検討から得られた共通的な考え方】

安全安心な暮らし	除排雪対策や高齢者の生活支援など安全・安心して暮らせる生活環境の形成
アクセシビリティの確保	高齢化社会が進展する中小都市では、点在する集落等の地域の生活を支える公共交通のネットワークの形成が必要
都市機能の適正配置	地域の生活を支える中心市街地の再生。街なかは、都市規模に応じた都市機能の集積を図り歩いて楽しめる空間
コミュニティの維持再生	都市と農村の交流や多様なコミュニティなどにより支えられた都市
土地利用のあり方	市街地の拡大が抑制された都市構造
環境・景観に配慮した都市の形成	身近な自然、生産緑地の保全や集落等の歴史的な景観が維持された、緑のなかにたたずむ美しい都市構造
都市経営	地域環境を活かした産業育成と新たな投資や維持費を抑制する都市構造

【コンパクトシティ像の検討】



42